

# 森林塾通信

発行 KOA 森林塾 (事務局)  
0265-70-7065  
編集 早川清志  
題字 島崎洋路

## 『一年間よく来てくれました』

伊那市界隈は年間降水量が千二百ミリ程度で、しかも年間で最も雨の少ない季節のはずでしたが、とうとう降られてしまいました。どなたかが連れてきたのか、

それとも最終回の別れを惜しんだ涙雨だったのでしょうか。

とまれしよぼふる雨の中、十四年度最後の森林塾、きのこの菌打ちがおこなわれま



8,000回転のドリルで保科先生を助手に穴あけ

した。打ったのは四種類。シイタケ、ヒラタケ、エノキタケが種駒での植菌、ナメコはオガ菌で植菌をしてみました。

ここ二、三年山のきのこは不作続きで少し淋しい思いをしているのですが、そんな時でも裏庭にきのこのほだ木が置いてあればひと安心。量は必要ありませんが、やはり季節節で旬のものを味わってみたいものです。

通年コースの十七回目の今回も、またまた多くの方が参加してくれました。一年間を通しての皆勤がなんと今年は八名の方。尾形さん、木村さん、黒岩さん、小泉さん、佐藤さん、淵上さん、宮沢さん、和辻さん。ほとんどが遠くからの方で、皆さん大変お疲れ様でした。



コンコンコンコン、無心。何も考えてない

皆勤に近い方も含めて精勤が十一名。江尻さん、長部さん、北澤さん、鬼頭さん、斉藤さん、館野さん、坪内さん、長谷川さん、松田さん、山下さん、山田さん、ありがとうございます。二年目の長坂さんは去年皆勤、今年精勤、本当にありがとうございます。

### 通年コース 第十七回 きのこの菌うち 3月1日(土)

8時30分 島崎先生の山小屋に集合。先生方のあいさつ。日程説明と、きのこの菌うちについての説明  
9時30分 まずシイタケの種駒を百二十本のコナラ



特別講師はもと銀行マン、今ストレスなしのきのこ屋さん 合って統一して欲しいなあ。それぞれ四十本ほどに植菌して駒打ち終了。雨足が強まり、いよいよ本降りになってきた

に打つ。品種はおなじみ森産業の290。自然発生する中低温性で、乾しシイタケにもできる便利な品種。一本の原木に二十〜三十個の駒を斜に。

今年の原木はイントラの後藤さん、川島さんが用意してくれました。林道設計で使わせてもらった手良沢山の野底財産区有林から担ぎ出してきたもの。相当シンドイ作業だったそうです

10時30分 シイタケ終了。次はヒラタケをクルミとサクラに。そしてエノキタケをサクラ、シラカバ、ナラに。この二種類の種駒は大貫菌茸製なので径は8.5ミリ。森産業は6.2ミリだったので刃先の交換を忘れずに。このあたり業界内で話し



オガ菌1リットルで0.27立米(一石)くらいに植えられる

2時 午後の部開始。20センチくらいの短木の木口にオガ菌を塗る作業。そのまま使ってもつたいないので米ぬかとおが粉で七倍に増量。オガ粉はできれば広葉樹のものがベターだが、なければ針葉樹のものを半年以上寝かし、テルペン類をとばして使う。オガ菌は種駒より菌の回りが早いので今日植菌したナメコは今秋には収穫できるはずですよ

3時 作業大方終了し、修了式に入る。先生方のあい



大山持ちさん皆勤。あとは実践あるのみ

さつと皆勤、精勤の表彰。一年間よくおいでくださいました。ありがとうございました。九期生主催の謝恩会が木村幹事長のもと六頃時から始まりました。積もる話アレコレ。終わってみればあっとい間だった



ペタペタペタ、雑菌を混ぜないで～

ような気もしますが本当に一年お疲れ様

参加者/江尻さん、尾形さん、長部さん、梶原さん、北澤さん、鬼頭さん、木村さん、黒岩さん、小泉さん、斎藤さん、佐藤さん、下平さん、館野さん、成田さん、長谷川さん、淵上さん、松田さん、宮沢さん、山下さん、山田さん、和辻さん、風見さん、長坂さん、桃澤さん

講師/保科先生、島崎先生 特別講師/遠藤さん スタッフ/後藤、川島、坂野、早川



惜しくも精勤。後輩の指導よろしく



これはエノキタケ、謝恩会の肴になった

十五年度の森林塾 塾生募集中です

ただ今通年コースと専門コースの塾生募集中です。通年コースの締め切りが3月27日(木)、専門コースが3月17日(月)となっております。カリキュラムが大きく変わっているところはありますが、通年コースの日程がほぼ、金、土の連続となります。十五年度もよろしく



去年皆勤、今年精勤。ただただ感謝です

今、林業界はじめ環境関連の分野でも木質バイオマスの話題になっています。その際必ず引き合いに出されるのが北欧、特にスウェーデンでしようか。私の場合、スウェーデンには残念ながら滞在した経験はありませんが、三年ほど前にイギリス、フィランドを旅行しました。この時はすでに林業に興味を持っていて造林地、製材所、苗畑、森林博物館などを見て回

フィンランド 通信 後藤知之

りました。これらの場所で見聞きしたこと、またその他、フィンランドの見所や生活についてなど書かせていただきます。 ロンドン郊外ヒースローからFINNAIRでヘルシンキ国際空港に到着したのは、九月中旬のことでした。高速バスでE75を約一・五時間、ラハティの知人宅に到着。この家は、妻の友人であるマイヤのご家族が住んでいらつしやるアパートメント(日本のマンションにあたります)です。ここを拠点にしてあちらこちら見て回りました。 まず、近くの森へピクニックに行きました。フィンランドの林は見慣れた日本のそれとは大きく異なります。まず気づくのが樹種が少ないこと。フィンランドの林業経済の中心であるEtelä-Savoの概況を記した資料によると、この地域の植生は、マツ四十一パーセント、スプルース三十九パーセント、その他広葉樹(シラカバ、ハンノキ、ポプラなど)二十パーセントとなっています。とてもさっぱりとした林だという印象を受けました。 ところが、目を林床に向けてびつくり。コケが一面に生えているように見えたものは、よく見るとブルーベリーでした。そして深い青の実がそこここになっているではあ

りませんが、一つつまんで口へ放り込むと...甘い。しばし至福の時を味わいました。 ラハティから幹線道路を飛ばし一路フィンランド森林博物館へ。ここでまず地元森林センター職員の方に育苗センター、周辺の森を案内してもらいました。育苗センターでは、マツ、スプルース、カラマツ、シラカバの苗を生産。販売価格は、スプルース一・二FIM(当時のレートで一FIMが約二十二円)、カラマツが二・五FIM、シラカバが二FIM。スプルースはヘクタール当り二千本を植林、マツは同二千本以上植林するそうです。 次に近くの森へ向かいました。職員の方が持っている資料を見せてもらおうと、それは日本でいう森林施業計画に相当するもので、何年度にどこを間伐すべきかという情報が地図上に色分けして示されていました。職員の方曰く、間伐計画は百パーセント達成している。その理由を訪ねると、スプルースの間伐周期と収支を教えてくださいました。初回間伐は三十一、三十五年生時、材をすべてパルプに出すとしてヘクタール当り五千、七千FIMの収入になる。その後、十年毎に間伐を繰り返して、七十年で主伐。総収入は、ヘクタールあたり五万FIMに達するそうです。



次は製材所。伺った時処理していたのは、直径二十八センチ、長さ四・六メートルのマツでした。一台の製材機あたりの処理能力は分十一本。一回製材機に通すだけで、丸太が五枚の板になっていました。処理速度にも驚きました。面白かったのは製材にかける前にまず金属の有無のチェックを行っていることです。これは、ロシア材の場合、戦争時の弾丸が0・六パーセントの割合で残っているためだそうです。担当者によると製品は日本にも輸出しているということでした。

ほんの数力所見ただけです。フィンランドでは林業は一大産業だということがよくわかりました。ここが、日本と決定的に異なる点です。そのため、間伐手遅れなどという状況は起こり得ないようです。

さて、少しフィンランドの住宅や食事について書いてみます。フィンランドの住宅の特徴は品質の高さと価格の安さだと思えます。ラハティで宿泊させていただいたアパートメントは築五十年以上ですが、建築時から全室石油式の床暖房です。また窓は二重サッシで中にブラインドが入っていて、なるほどと感心しました。また別に招待されたアパートメントは、中古で購入し約五百五十万円。外観、内装ともに美しくかつ機能的でその価格に驚きました。

この他、ヘルシンキ市内でも一軒のアパートメント、一軒の一戸建て住宅を訪問しましたが、いずれも玄関で靴を脱いで室内に入るのとは日本と同じでした。浴室はアパートメントではシャワーのみどころもあり、一戸建てではサウナが標準装備。このサウナには何力所か入る機会がありました。サウナの中ではシラカバの枝で体をたたくことにより芳香を楽しむことができます。コテージに設置されているサウナは多くが湖に面しているため、サウナで体が熱くなると目の前の湖に飛び込んで体を冷ま

すのがフィンランド流。これが冬の場合は、信じられないことに雪の中に体を投げ出すそうです。ただ、フィンランド人は気温十五度でも普通に湖で泳ぐそうなので、驚くには及ばないということのようです。

フィンランドスタイルの朝食は次のとおりです。数種類のパン、その上にスライスしたチーズ、ハム、レタス、キュウリ、トマトを乗せ、かぶりつく。数種類のヨーグルト、果物、ミルク、酸っぱいミルクのピーマ、紅茶。そして、ピラッカ。これは、ピロシキと餃子を足して二で割ったようなライ麦パンで、中に米やポテト、挽肉などが入りとても美味。サウナから出た後は暖炉でソーセージを焼き、ビールと一緒にいただきます。

数力所のマーケットにも買い物に行きました。お気に入りにはオープンマーケット。ここでは、多種類のベリーもなんと大タルに山盛りにして量り売りしていました。スーパーマーケットも野菜、果物、肉類、魚はほとんどすべてばら売りです。好きな量だけ袋に詰め、そばにある秤に載せ、種類を指定するボタンを押すとバーコードシールが印刷され、それを袋に貼りキャッシャーに持っていきます。飲み物の多くはリターナブルビンでした。ペットボトルもありますが肉厚でリユースされるそうです。

さて、最後に私の仮説を一つ。それは、なぜヨーロッパで、その中でも北欧で環境意識が高いかということについてです。イギリスを回って驚いたのは、都市と都市の間がすべて牧場だったということ。太古に存在した森林をすべて失っているわけです。

ドイツも同様。フィンランドを旅して感じたのは、日本の図太い緑と違い、静かで繊細な緑だということです。この国では、数多い湖が酸性雨により壊滅的なダメージを過去に受けています。つまり、ヨーロッパの多くの国では過去に一度自然をすべて失っているのではないかと。北欧では、自然自体が傷つきやすいのではないかと、ということとです。そのため、特に意識して自然を守る必要があるのではないかと、今回の旅で考えました。

長い文章を最後までお読みいただきありがとうございます。また、偉大なるホスピタリティを備えているフィンランド人、特にマイヤの一族の方々に大いなる感謝の念を捧げます。

KIITOS.

「KOA森林塾六年生まで頑張ります。」と自己紹介した自分は今年度四年目。とうとう部長と呼ばれるまでに昇格した。おめでとう。そう、宴会部長である。昼間は省略して部長と呼んでくださる方もいるからありがたい。「はい」などとうっかり返事をしているいけない。(森林塾通年コースに四年生の言葉は無い。私は名譽OBという位(?)をもらい宴会には参加しつつつけている。早川さんから頂いた私の特権である。)夜、別段芸はないが、喋り続ける、人より先に寝ることはまずない。

同期仲間からは「先輩らしく尊敬されるように振舞って!」と忠告される。先輩であるという意識はほとんどない。冬、森林塾の忘年会が近づくと、出たい!なんかないか?そうだ!駒ヶ根の森の活動日をぶつけよう。作業をして、そのまま山小屋に駆けつけたいのだ。少しは先輩

らしく見えるだろう。昨年の春、幸運にも作業フィールドが見つかった。駒ヶ根市が所有する一ヘクタールの森を自由に整備して良いという好条件だ。なじみのメンバーを募り会を発足。ハリリンと名づけた針葉樹の森は、Srが30% 手入れの遅れた四十六年生のヒノキ中心の林。大きな赤松や杉、まつすぐで太い栗の木もある。Srのコントロール、伐木の演習、植生変遷の追跡調査など自分たちなりの目的を検討し五区画に分け施行方針を決めた。

ヒロリンは可愛らしい広葉樹の林、小さな川が流れている。木を切り、道を作ったり橋を架けたりと手を入れる。そこにある全ての樹種を一本以上は残す。散歩ができ樹木の学習に適する親しみの空間にしたいのだ。

プロを目指す人、技術を向上させたい人、片付ける作業が好きの人、地元での活動でリーダー的立場の人、様々である。仲間は十人ほど、多くは県外である。三時間以上の道のりをよく来るなあと思う。なんでだろう。楽しいのだから。運営形態はいたって大雑把だが、とにかくよく話し合う。そして方針は決まる。

積雪の多い冬であったがこの一月には雪の上の伐木作業



**リレー通信**  
 歩くスピードで  
 “森愛なる自己分析と継続的な視点”  
 藤本 智



時代は少しずつ動いている。補助金制度は幅を広げ、主催者側がボランティアで負担が重いと

も経験した。爽快だった。やり始めると新たな目標も生れる。切捨てではなく材を利用したい。整備にあと二年はかけるつもりだ。  
「山の仕事は趣味のひとつで、」と言えるまでになったのは環境問題を考えてがきっかけではない。「自然が好き」からスタートした。早池峰で見たクマタカ、北海道で見たナキウサギやヒグマは大切な思い出である。  
森への愛着を自覚し課題多しと言われる林業に関心を抱き作業を体験してみたいと思ったのが十年前。当時ボランティア行事は少なく情報欲しさに県の地方事務所に行こうと思ったが勇気が無くて行けなかった。

二年後隣の岐阜県にイベントを見つけた私のボランティア活動はスタートした。岐阜の森には今も思い入れがあり人とのつきあひも続いている。その後県内でも行事や自然学校を見つけては参加しながら知り合いと活動を徐々に広げ

てきた。昨年までに市、県、各林野行政の人と交流を持つにいたった。  
国有林の森林官と酒を飲み、育樹祭には県の林務課から森林教室のインストラクターを頼まれる。岐阜に始まり、伊那で技術を教わり、ようやく地元行政とのパイプができた。今年には八ヶ岳山麓で市民による森林の整備に主体的な立場で参加する。イベントさえ見つけられなかった自分がよくここまでできたと思う。  
地域の森で活動したかった自分は、今思い描いたとおり出発点に立つことができなかつた。あきらめかけては思い続け、巡り合うチャンスに可能な限り参加し、誘いはなるべく断らない、そんな生熊が今につながるのだと思いつつ別の要因も感じている。森林に対する社会と行政の関わりをみる広がりや深さへの傾向である。依然厳しい状況は続き、転換のスピードは充分と言えないのだから、硬直の

嘆く従来のイベントスタイルは、より実践的な講習会へと転換しつつある。多様化し自分の出番と知り合いは加速度的に増えていく。  
流行はさておき、大いなる決心と行動力でターンし自己実現する人に多く出会う。すごいなと思う。自分は初心者でゆっくりだけど、しぶとく欲ばりだ。あちこち出かける自分の行動パターンは森の多様性と通ずるものがあるな。あーと言っても感心する人はいない。  
私は、自分のことを「歩くスピード」と表現する。遅いけれど止まっている訳ではない。前を見て進めばチャンスに出会うし思いはいつか叶う。山が見える環境を望んでこの地に来た。自慢は仕事場から見える八ヶ岳の風景。日曜は午後出発しても北八ヶ岳の山小屋でくつろぐことができる。主人はなじみよく酒を薦められる。予定は変わり宿泊。月曜の朝、白駒の池を

出発して定刻通り会社へ出勤する人間は私くらいである。  
暖かくなればカメラと図鑑と野帳を持って里山を徘徊する。今年は裏山に森観察のオリジナルルートを設定し自らガイドを務めようと企んでいる。樹木に親しむゲームの考案。ガイドマップの作成にも着手する。宴会部長大忙し！

が予想される2003年の春である。  
注)会の名前は「森信(しんしん)クラブ イーナ23」 駒ヶ根の森は、森林塾のインストラクターに紹介していただきました。ボランティア保険対応完備、会員若干名募集中。  
きのこの姿は、とてもかわいい。私が初めてきのこを育てたのは3年前。時期が過ぎた売れ残り、なめこのポットだった。見本の写真がたまらなく可愛かった。六百元。連れ帰って類づえをついて眺める。何日も音沙汰なし。店の人が時期はずれなのをしきりに気にしていたな...。  
しかし福は来るもの、一つでた。妻と、このまま終わったら一本六百元だね、と笑っていた。そのうちいや、ひよつとしたらこのまま終わるかも知れんと思つようになった。そしたらもう一本でた。そして終わった。二本目は力を振り絞って出してみたが力尽きた様子。一本三百円となる。しかしこれはロマンを買ったのだ。  
数年前、妻と春先に山菜採りで歩いていたら目を引くものがあつた。山の中の細い川に木の橋が架かっている。そのほぼ真ん中に一本のきのこ

が生えていた。日に当たり光っていた。収穫し、においを嗅ぐとしいたけのにおいがした。調べると、しいたけは春にも発生とある。ほれ、これはしいたけだから食べるといふと妻の母は「やめな」といった。しかし、ふたりに焼いて食べた。うまかつた。しいたけだったのか？うでもよい。うまかつた。現地は日も当たり風も通り湿度も十分。なるほどいい条件である。余つた駒は橋に打つとよい？沢山のしいたけが採れるであろう。しかし橋は落ちるであろう。でかいきのこをいっぱい採れば採るほど早く落ちるだろう。クワイ河マーチを歌いながら収穫するとよいであろう。  
結婚のとき、妻の父が腕を一組くれた。職人が作つたもので使って塗りが剥がれてきたら、そこに持つていけば塗りなおしてくれると聞いていた。いま、塗りなおしをお願いしている。職人さんは上伊那にたつた一つの木地屋さんで塗り師のしごととまでできるので製材、乾燥、ろくる挽き、漆塗りまでやって、売っている。しごとについていろいろ尋ねると、仕事場に案内してくれた。ろくろ、無数の自作刃物、砥石、試作の器、荒削りの木地。刃物を作る道具や古参の鋳物おが屑ストープも控えてい

る。独特な空気には夢中になった。すばらしい文化である。  
漆の塗りなおしは、剥がしと染み抜きと塗りで二ヶ月くらい。手元に来ても一ヶ月半くらい使わずにさらしておくと。新品同様になりますよとのこと。うれしい。一つ塗りなおすと千円。手間の割には安いありがたい。この職人さんが好きになったので、今度普段使いに小さな器を買おうと思う。  
木地屋のしごと。漆。これもまた日本古来のよいものである。腕が戻ったら今まで以上にかわいがつて使おうと思う。「儲からないんだけどね」といつて笑つた顔が印象的だった。幸せな顔をしていた。(カブ夫)

終わってみればあつという間のような。ありがとうございましたご都合にあわせ十五年度もご参加の検討をよろしくお願いします

投稿大歓迎。ご意見、ご質問、ご要望、事務局まで。  
TEL 0265-70-7065  
FAX 0265-70-7994  
E-mail: ki-hayakawa@koanet.co.jp  
sh-sakano@koanet.co.jp  
mi-tsuboki@koanet.co.jp  
携帯:0902-53-26375 (開催日)  
H.P.http://www.koanet.co.jp

